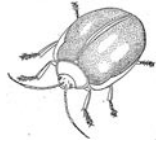


書 評



伴信彦 著 「喜寿のときめき」, 369 頁

竹田 真木生

何が幸いするか判らない。県立の佐用町昆虫館が廃館になって、これを盛り返そうと驚くべき人々が集まった。やりたければ、自分たちでやればいいではないかと、金も用意も何もない人たちが集まって NPO ができた。今年はそうして昆虫館が出発して早 5 年目になる。土石流も乗り越えて、少しずつ少しずつ、小石を積み上げるようにして前に進んできた。伴さんは、昆虫館を動かす重要なエンジンの 1 つ、シニア自然大学出身で、現役時代は、有能な経済人で、定年になって、日本の蝶を 200 種集めると一念発起し、昨年これを成し遂げた。喜寿の年である。平坦な道ではなかった。5 度のがん再発との戦いがあった (壮絶な病巣の写真も載せられている)。

二二六事件の年に生まれ、1 年半で国は日中戦争に突っ込んでゆく。少年の日に疎開や空襲も経験された。この本は 2 部に分かれていて、第一部 (古希から出合った二百種の蝶たち) が、この 200 種の征服までの過程を、第 2 (七十七年 記憶のかけら) は、77 年の人生をふりかえっての、思い出深い出来事が書かれている。今、がんと最後の戦いを行っている私の父は、法学部に行ったが、肺浸潤をやって復学した途端に学徒出陣となって、それはそれでつらい日々を生きただろう。3 番目、伴さんの 15 年後に私が同じ門をくぐろうとした時は前年に学生紛争が燃え上がり、ちょうどそれが炎上して燃え崩れるような時で、全学封鎖で授業もなかった。あの日々を振り返るのは難しい。戦争も、地震も、原発事故も、そういうものは、みんないきなりやってきて、夢も計画も滅茶苦茶にしてしまう。今年は第一次世界大戦から 100 年後。その頃まで、ベルディもワグナーもトルストイも生きていたわけで、いろいろなことがあったが、考えてみればみんなほんの 1 昔前の出来事である。この間に人類は、自らを 7 回消滅させるほどの原子爆弾を持ち、今また、どの大王、皇帝の軍隊よりも手ごわい、地球温暖化に直面させられている。

伴さんは神戸の地震も経験されている。災害や、戦争や、病苦と闘いながら、私達はその中で、自らの老いとの戦いも強いられる。負のスパイラルに落ち込んでしまうのが普通であるが、退職しても積極的な目標を掲げ、悲観的にならず明るく人生を切り抜けてこられた。伴さんのこの本は、「ですます体」で、ゆったりと漂うよう

に、いろいろな出来事を振り返り、出会った幸運と遭遇に感謝しながら流れていく。美しい奥さんへの感謝の気持ちも書かれていて、心が温かくなる。難局にうろたえず、悠揚と前向きに歩いてこられた姿勢には頭が下がる。

さて、きべりはむしで取り上げなくてはいけないのは、第 1 部の方であるが、200 種採集の為の心得、蝶に関する基本知識、採集地の情報がうまくまとめられている。それとともに甲山あたりの蝶相の少年の頃と現在の比較がおさめられているが、これが一番資料的価値があるだろう。付表が 3 つ添付されていて、さすが元銀行家だと思う。私は、子供の頃に、甲虫の神様と呼ばれた三輪勇四郎先生に遭遇し、台湾の蝶の標本や昆虫切手をいただいたり、昆虫の名前を教えていただいてから虫の道に入り、中学時代はムシとり仲間 (触角と名乗った) と藤原岳を中心に鈴鹿山脈や紀伊産地特に三重大学の演習林のある平倉というところによく行った。一人で動いていた時、京浜昆虫同好会というところが発行していた黄色表紙の 2 巻本があって、標本の作り方だけでなく、何処へ行ったらどういう虫がとれるかなどの情報が載せられ、非常にありがたかった。この本は少しそれに似ている。これから虫取りを始める子供たちにはよいガイドになるだろう。実際的な情報もたくさん入っている。私の場合は、その後三重県立博物館を中心に、30 - 40 代くらいの虫屋さん (三重県立博物館学芸員の富田靖男さん、トンボの方では有名な石田昇三さんなど) が、私たちの指導をしてくれたが、採集は中学で卒業して、高校生になってから、いま京大にいる西田律夫さんの指導で飼育をするようになった。この本で紹介されているギフチョウ (経が峰というところに沢山いた) や、湖畔に普通にいたミドリシジミの飼育の話は懐かしい。この本ではクロマダラソテツシジミの低温誘導性の黒化型が紹介されているが、ミドリシジミでは低温保蔵をすると後翅の裏の白紋が肥大して、キリシマミドリのようなになる phenocopy にも数例遭遇した。キナバル山も懐かしい。私も登ったが私の同僚や学生が立て続けに亡くなった時期で、ひとしお思い出が深い。本当にすばらしい山であった。私はラフレシアには遭遇できなかったが、世の中は確かに大きく変わったが、この本を読んでいると懐かしさがよみがえる。変わっていないことも多いのだと。ぜひこの共感を後くる子供たちにも伝えたいと思う。彼らがこの本を手取るチャンスがあるよう祈る。こどもたちが直接伴さんにお話を伺える時間が続けばもっとよい。

(Makio TAKEDA 神戸大学農学研究科教授)